

日本近代洋画の産土

—佐賀城下楠公社ゆかりの洋画家たち—

松本 誠 一

はじめに

佐賀城は別名を沈み城とも称された平城で、この一辺6～7町、幅40間の内堀を四方に廻らし、北を大手として築かれた城は、旧佐賀藩35万7千石の領主鍋島氏代々の居城であった。現在は、たびたびの罷災、兵火のため、城門を残すだけとなっている。いわゆる鯨の門である。この鯨の門から北へ進むとやがて城を囲む内堀に行きあたる。今は、堀端には楠の大樹が水面に深い歴史の影を落している。

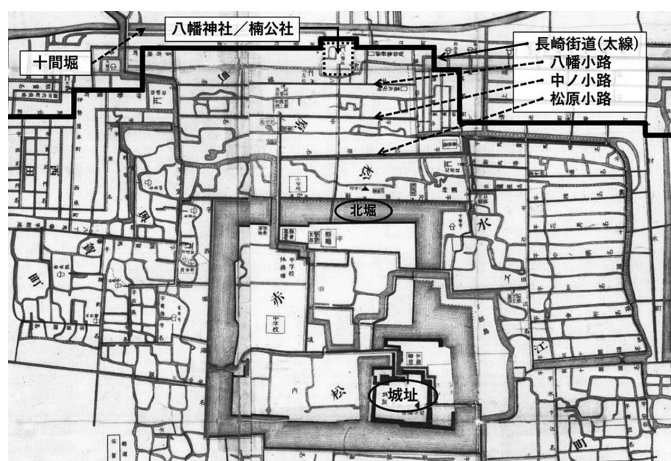
藩主を中心とした鍋島家と親類四家、そして親類同格の四家は城内に居を構えていたが、上級家臣団は、城濠を取り巻く北堀端、西堀端、南堀端小路と東側の片田江堅小路の、四方から城内が見通される位置を占めることによって、いわば平時の佐賀城の守りともなっていた。そこに加えて、城の大手となる北側は、まず内堀に面した北堀端小路とそれに沿うように植えられた松樹の叢林によって、さらに北方からの城への視界が妨げられていた。この城の北からの守りを強く意識した屋敷割は、東から進んできた長崎街道が、佐賀城下において北側へと、城下町を大きく張り出して通され西へと下っていくことのもいえる。これとあわせて、長崎街道が一番北へと上がるその南側域には、街道に並走するかたちで、武家地を截然と区画する小路と水路が整備されていた。長崎街道と北堀との間に広がる武家地の屋敷群である。ここでは、先に述べた北堀端小路に並行して一本一本の小路が東西におかれ、上級家臣団の松原小路、中ノ小路から中級家臣団の八幡小路そして長崎街道へとつながる整然とした町並みが形成されていた。幕末の佐賀で青年期を過ごした久米

邦武（1839–1931、本稿23頁に略歴）は、この長崎街道にもっとも近い八幡小路に生まれた。

余が生れた佐嘉城下の八幡小路の宅裏は、中町とて長崎街道の町家が続き、又其の町裏は要害の林叢であつた。元来佐嘉城は沈城といひ、普通の城の如く高地の山崖に倚つて城下を瞰下するやうな形勢はなく、全然平地であつて何の眺望もなく、四面水田を以て囲まれ、郭外の要害には、種々の沼沢や、溝渠を縦横に掘つて、其の堤防を林叢にし、上居には森蔚な樹を植ゑ、平時は水田の灌漑・肥料の採集・魚介の養成地とし、事ある時は兵を伏せ、林間を縫うて隠密に兵を動かし、地理を諳知せざる敵兵が水田沼沢に踏み迷ふを窺うて、險夷を了悉する城兵が神出鬼没して駈け悩す作戦計画の下に地形を構成した要害であつた。

（久米邦武『久米博士 九十年回顧録 上巻』早稲田大学出版部、1934年、p.109）

ここに見るように、佐賀城は、平坦な土地に造営されているので、まず広い内堀を四周に廻らし、さらにその外側に武家屋敷群を配置していた。そして長崎街道は武家地の外側の町人地内を何回も



「佐賀市街明細地図」1899年（明治32）佐賀県立図書館Public Domain 地図上の神社、街道、小路などの表示は筆者が加えたものである。

曲折を重ね通過していたのである。その結果、城内は他国人の目からは隠されることになる。

佐賀は松平肥前守殿（三十六万石）の御城下なり。入口に総門見付番所あり。町いと長し。所々草葺の家交りて見ゆ。中にも白山町といふあたり。家居よろし。御城は通り筋よりは見えぬ。

（菱屋平七（尾張商人）『筑紫紀行 巻之五』1802年／『改訂紀行文集 五版』続帝国文庫第20編、博文館、1909年、p. 367）

さらに、この周到に配された城下の町割りは、長崎街道の北側、城下町の総構えのもっとも外側に、「外曲輪北の堀」いわゆる十間堀を東西方向に廻らすことによって、城下の一層の防御の備えとしていた。

龍造寺八幡宮と楠神社（義祭同盟）

この佐賀城下の都市空間において、城下町の基軸となる、佐賀城内の南北の中心軸の延長線上が東西の十間堀川と交わる位置に、龍造寺八幡宮がある。この名そのままに、龍造寺家の崇敬が厚く、「五州二島の太守」と仰がれた戦国大名龍造寺隆信（1529-1584）が、1548年（天文17）、20歳のときに龍造寺本家の跡を継いで村中城（佐賀城の前身）に入るときには、衆議による総領職の決定のため、神意を問うべく八幡宮に詣ってくじを引いて跡目を決したと言われている^{（註1）}。

龍造寺ノ嫡流既ニ断ナントス、臣族評議スラク、名跡ノ儀水ケ江ノ胤信カ、新次郎家就カ二人ノ内ナラントテ、龍造寺八幡宮ニテくじヲ上ケシニ、胤信公ニソ下リケル

（『直茂公譜考補』『佐賀県近世資料 第1編第1巻』佐賀県立図書館、1993年、p. 266）

龍造寺八幡宮は、龍造寺家の始祖南次郎季家が1187年（文治3）^{（註2）}に、鎌倉鶴ヶ丘八幡宮の分霊を城内北西の地に勧請した社であり、龍造寺家の祖霊としてまさに八幡宮は、龍造寺家一門の守護神であり鎮守そして産土神であった。はじめ、

村中城内にあった八幡宮は、その後、鍋島初代藩主勝茂のとき、1608年（慶長13）に佐賀城総普請が行われ、この前後に村中城を拡張し、本丸、天守閣が構築されていくなかで、八幡宮はこの間において、城外北方0.6kmの米屋町と白山町との境に遷座したと考えられる^{（註3）}。このとき、八幡宮は、現在地点よりもっと南側、すなわち八幡小路に至る広大な社地を有していた。すなわち八幡小路の名称も、ここに由来している。前述の久米邦武が、後年、みずからの信仰について「産土神」に触れているのも、八幡宮の門前に生まれ、藩校弘道館で学んだ者が生涯抱き続けた、祖霊に対する敬意からであったと思われるのである^{（註4）}。

先生（邦武：筆者註）に神の有無を問ふ。先生之に答へて、「神は産土神とて生を受けし土地の神あり、遠国に行くも、其の神之を護る。吾人は龍造寺八幡宮の氏子なれば、是れ吾人の産土神なり」と。

（『文学博士易堂先生小伝』／久米邦武『久米博士 九十年回顧録 上巻』早稲田大学出版部、1934年、p. 19）



楠公父子御尊像 楠神社

現在、この龍造寺八幡宮の境内に楠木正成、正行父子を祀る楠神社が鎮座している。毎年、5月25日の楠公命日には例祭が行われるが、この日御開帳されるのが、甲冑姿の楠公父子湊川惜別の場面の御神体である。

1858年（安政5）、久米邦武は、龍造寺八幡宮境内の楠社において行われた「楠社御祭」^{（なんしやおんまつり）}に参加し、佐賀藩請役家老（執政）鍋島安房を祭主に以下袴を着けて順次礼拝を遂げた。邦武20歳のときである。この祭祀こそが、佐賀藩勤王家の拠り所

となった「義祭同盟」の祭儀であった。

「葉隠」研究の栗原荒野（1886-1976）は、義祭同盟にみる勤王運動について、楠木正成・正行父子を祭り、忠孝の道を説くことは、「葉隠」の忠誠の対象を一藩の主君すなわち殿様においたことと、楠公の忠誠においてその心情の本質は変わるところはないとしたが、義祭同盟の尊王の義を慕う熱情は、幕末佐賀藩の英傑たちの心をつよく揺り動かした。

伝統的葉隠思想の発達と共に、郷土佐賀の精神文化発達史上特筆すべき事は、徳川幕府初期、佐賀における楠公崇拜の事実即ち佐賀藩士深江平兵衛入道信溪の楠公父子創祀と、幕末時代佐賀藩勤皇家によつて組織された楠公義祭同盟とである。

（栗原荒野『葉隠の神髓』惇信堂、1943年、〈解説〉p. 39）

ここにあるように、義祭同盟が礼拝の対象としたのは、楠公父子であり、それは鍋島清久（1490-1544）を祖に持つ佐賀藩士深江信溪（茂利の次男、1620-1682）が発願し京都の仏師法橋宗而そうじに託して彫らせた先述の楠木正成、正行父子の木像であった。摂津国桜井駅における楠公父子訣別の場面の甲冑像であり、1663年（寛文3）、佐賀郡北原村（現在の和町大字久池井北原）永明寺内に安置し祀られたのだった。この楠公木像の胎内には、のちの修理の過程で像内納入品があることが知られることになる。そこには法華経普門品一卷、金剛般若波羅蜜経さらに奉賛者の奉加帳があり、それは本藩藩主から小城、蓮池、鹿島の三支藩の藩主、親類、家臣におよび、また僧侶や尼にまで至る名前が録され、合わせて240余人に及んでいた。さらにその奥には、造立の趣意書である願主深江信溪の発願文が納められていた。栗原荒野はこの趣意書について、「心血を注いだ熱情溢るゝ文章」であり、「日本精神発達史上にも特筆されるべき貴重な文献」^(註5)と述べている。趣意書の要諦と

なるところを少し長いが抜き書きしたい。

然れば、予忠なく孝なきを思ふに、人の忠孝をすゝめ、忠孝を貴むに過べからず。然れ共身尺寸の徳なく、慈悲忍行の信善をなさず、仏神の御教導にたがふが故に、口に出して忠孝をすゝむるとも、人いかでか真実の忠孝をなすべき、只古今の忠有り孝有るの人を崇めて、人の鏡に備へんにはしかじと、多年心中にのみ挾て今日に至る。願はくは日本無双の名将、忠孝の勇士なれば、楠河内守正成公・同帯刀正行の両影をつくりて、予が草庵に崇め、心あらん朋友等にをがませて、人の心に忠孝をふかくせしめなん事を。大名たり積門たらん人は、此両将の為に塔をも建て寺をも作り、且は亡魂を弔ひ、且仏法王法のその助護ともなすべきに、さばかりの名将の為寺をも建てず、堂をも作らず、誦経念仏する人もなく空しく三百余年を送る。浅ましきにはあらずや。某賤しくも旦暮に是を思ふと雖も、財なく徳なきの隠人、更に言葉に出すべきにもあらず、心を同じうするの僧俗に漸く此事を語る。在家には大木英鉄と云ふ者、法師には真阿上人のみ此両将を重んじて絵に書文字に書いて其跡をとひ、深く忠孝を貴む。天下広ければ、寺をも建て影をも作り、崇むる人有まじきにもあらざれども、摂州兵庫塚を見れば草木を上うへに植ゑたるのみなり、浅ましきかな。世に忠実の人なく、孝真の人なきが故に、われらごときの不義のやから世に多きものなるにや。依之賤しくも某両公の尊影を作り、父母主君の名号と共にして此影を拝み、灯花の一閑（幻花の一深：『楠公義祭同盟』p. 86）となさん。

（栗原荒野『葉隠の神髓』惇信堂、1943年、〈解説〉p. 40）／『楠公義祭同盟』楠公義祭同盟結成百五十年記念顕彰碑建立期成会、2003年、pp. 85-87。）

楠公父子木像は、その後文化年間には藩主鍋島家菩提寺高伝寺に在ったが、経年の損傷著しく、

1813年（文化10）、有職故実家の山領利昌（主馬）他佐賀藩士によって修補され、文化13年、高伝寺別院の梅林庵に安置、新たな祭祀が行われるようになった。

1835年（天保6）5月、佐賀城二ノ丸が焼失する。その6日後には藩主斉正（直正）の庶兄で、親類同格の須古領主鍋島茂真（安房、1813-1866）が請役（執政・筆頭家老）となった。安房は以後、安政末までその地位にあって藩政を主導することになる。藩政緊迫と藩財政逼迫の中にあつて、二ノ丸焼失という禍を転じて好機と捉える藩政改革が動き始めたのであつた。爾後佐賀藩の天保の改革が本格的に展開されていくことになる。この時代の藩主直正は、佐幕的傾向は強いながらも、とくに長崎港の警備によって得た遠来の知識や周辺国の状況と合わせて、国情の変化への対応の即応性もまた感じていた。そのことは端的に藩内の諸制度や行政機構の刷新を通じて、財政、教育、軍制改革の実行となつてあらわれた。とりわけ教育における人材創出において、藩校弘道館が果たした役割は大きく、弘道館の体制拡充と学業の督励法が厳重に実施されたのである。ここにあつて、朱子学さらには陽明学を中心とする教学綱領に対して、傍系とみなされていたのが、1850年（嘉永3）に弘道館教諭となつた枝吉神陽（1822-1862）の尊王思想であつた。

抑々勤王論は寛政の松平樂翁侯も重じるところにして、爾来全国に亙り、勤王の下に諸藩一致して外国に当るべしとの論は壮年の志士によりて唱道せられ、佐嘉に於ても水戸と呼応して其意を拡張するもの少からざりしが、中にも枝吉神陽は、今に学校の教鞭を執れる其父枝吉南濠（種彰）の、日本の君は天皇のみてふ持論を発展し、江戸の昌平黌にて、水戸の大日本史に將軍家臣伝あるを失體と非難して名分を正し、以て書生寮を風動したりしが、帰るの後は学館教諭として後進を鼓作し

たり。されど老輩と相容れざりしかば、公は彼を側にある軍事機密の御備立方所属の什物方に任用せられたり。此局は藩の史官に当たるものにて、秘書、重器を掌り、領内の地理要害を詳悉する職たり。同僚の相良宗左衛門は佐嘉にて国学家と称ふる藩の史料記録を専門に研究し、年輩も神陽と齊しく、気力の精幹なる人なりしかば、彼は共に心を同じうして藩史を攻究し、軍備の機密を兼ねて領内の山川を巡検し、古蹟古文書を搜索して大に史料を富ませたり。

（『鍋島直正公伝 第3編』中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、p. 426）

文中、「公は彼を側にある軍事機密の御備立方所属の什物方に任用せられたり。」とあるように、藩主直正は、藩士の思想を厳しく統制することはなく、むしろ闊達な議論が交わされることを望んでいたと言われる。そこにはやはり藩のみならず国内外の切迫した情勢を専断することなく、客観的に見定めようとする直正の姿をみるができる。

公の性格は守法に強く、幕府の法規に対しては厳格の態度を執ると共に、皇室尊崇の意甚だ厚く神仏と主上との事には陰にても儀容を正されたり。されば去年米露軍艦の渡来以来、時代の変化よりして国家の大事に江戸の専断の許されざるを察知せらるゝや、執政鍋島安房と竊に家中の尊王心を啓誘せんと謀られたり。安房は教育に深く心を用ひ、学校の奨励、火術の訓練みな之を担当し、よく校の規則を執りて徳教の統一を持したりしが、俊才偉能の士には各その所長才力を伸べしめて、隔意なく交はれり。

（『鍋島直正公伝 第4編』中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、pp. 149-150）

直正は、藩内における異論、異同をしりぞけることなく、広く新知識を得ることによって藩の舵取りおこなつた。執政安房が公然と動けたのも、こうした藩主周辺におけるある種自由とも言える

環境があつてのことだっただろう^(註6)。

1850年（嘉永3）、この年の楠公命日の5月25日、佐賀藩第一の勤王家で弘道館指南役（同年教諭）の枝吉神陽と史家相良宗左衛門が首唱者となり、信溪の後裔深江俊助（種^{たね}禄）を祭主とし梅林庵で祭祀が執り行われた。このときの集まりが「義祭同盟」と称されることとなり、幕末佐賀における勤王家最初の会合となった。会したものは、神陽の実弟枝吉次郎（副島種臣）のほか、島田右衛門（義勇）、大木幡六（喬任）ら神陽に身近な人々など38名であった。当時の連名帳は、年次が欠けるものの参加者の動向を窺うことができる。翌4年43名、翌々年は32名と会は続き、嘉永5年には江藤又蔵（新平）が参加している。そして、同6年からは藩の重臣や直正側近の名が見えてくる。彼らの参加によって、祭祀の内容と義祭同盟のことは直正にも報告されることがあり^(註7)、そこでの合議があつてか、梅林庵に安置された楠公父子像は佐賀城下へ遷されることになった。「直正公伝」1854年（安政元）の章によると、

龍造寺八幡宮の側なる本地堂を祓除して 祠堂となし、こゝに其像を安置して楠社と称し、安房自ら盟主となりて、宗室の鍋島大和、嫡子伊豆と共に同盟に加はりしが、公の近侍千住大之助、増田忠八郎、学校教職武富文之助等も亦加はり、旧同盟員なる枝吉兄弟、相良、空閑等二十余人もその多くは参集したり。是日始めて加盟したる少年は大隈八太郎（今の侯爵重信）、久米丈一郎（邦武）なりき。かくて八幡宮神職に祭典を執行せしめしが、祭主安房以下袴を着けて順次に礼拝を終ふるや、神職の宅に会して安房より玉串料一分を納め（以後例となす）、当日に於ける同盟者の氏名を奉書折紙に録して社に奉納せり。

（『鍋島直正公伝 第4編』中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、p.150）

との記述をみる事ができる。ここには安政元年

から5年までの出来事が含まれているようだが、この間に、神道の祭神としての神事の許可及び藩の筆頭家老（安房）の決裁を経て、1856年（安政3）に、楠公父子像は龍造寺八幡宮境内の本地堂に遷され祭典が執行されたのだ^(註8)。そして大隈八太郎（重信）が初めて参加したのは、安政2年、18歳のときで、安政3年、4年の連名帳は残っていないが、同5年には、大隈とともに久米丈一郎（邦武）の名が初めてみえる。邦武はこのとき大隈より1歳年下の20歳になっていた。

余は楠公の像には、幼少より寺参（梅林庵は久米家菩提寺：筆者註）の時之を知り、且龍造寺八幡宮は我が住居の八幡小路にあり、つい近所でもあり、朋友大隈八太郎より誘はれ、共に参集した。

（久米邦武『久米博士 九十年回顧録 上巻』早稲田大学出版社、1934年、p.318）

じつはこの連名帳の中には、維新の元勳でなくとも本論において欠くべからざる人物がいる。嘉永から安政年間に毎年参加している石尾左源太（孝基、1832-1902）である。のちに触れる岡田（旧姓石尾）三郎助（1869-1939）の父となる人物である。もう一人は、森鷗外の再婚相手の荒木茂子（森 志げ、1880-1936）の父、山口権六（後の荒木博臣、1837-1914）で、二人は安政5年と6年の連名帳に名を連ねていたのである。

楠公父子像を祀る楠神社（楠公社）は、産土龍造寺八幡宮の懐に抱かれるように、八幡宮境内の西側に建つが、そもそも二代藩主鍋島光茂が奉賛帳に賛同し、永明寺に祀られた楠公父子像が、佐賀城の鎮守である龍造寺八幡宮のもとに遷座したことは、城下・町屋の人々にとっても、ふさわしく、誇らしくさえあつただろう。そして、江戸から明治の初めにかけては、八幡宮は北の十間堀川から南へ大きく広がる社地を有し八幡小路を入口としていたがため、八幡小路はまさに佐賀藩の産土神へ通じる道とも言えるのだ。

また、この楠公父子像の遷移より早く、1834年（天保5）に、医学館（医学校のちに医学寮）が八幡小路、龍造寺八幡宮の東側に設置されていた。その後医学寮は、1851年（嘉永4）に蘭学寮を併設することになるが、蘭学寮は、1854年（安政元）には佐賀城下郊外の中折にあった火術方に移された。この目まぐるしい施設の変動は、幕末佐賀藩の広く国内外の変化を見据えた改革の実行であり、その根底には、長崎の築堡や佐賀藩の大砲鑄造をはじめ銃陣の訓練など、先端技術の導入への藩主直正を中心とする佐賀藩の他に抜きんでた国防への強い意志があったのである。

海外形勢の迫り来れる今日にありて、西洋の学藝を首に誘致したるは実に西洋医学なり。今や火術機械を彼より採用するの必要に迫られたりしが、（中略）其研究には蘭学を起す必要あるとゞもに、其科学を誘ひ得るものは医師の外にはなかりしかば、前に創めたる医学校を更に改善し、併せて蘭学を創めんと欲したり……。

（『鍋島直正公伝 第3編』中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、p.482）

幕末期の八幡小路は、尊王論という変革思想と西洋近代の科学思想がともに胚胎し、生まれ育っていった「近代への道」であったと言えそうなのである。またそこには時代の人々もいたのであった。

古川松根

楠公父子像が梅林庵から龍造寺八幡宮に遷座するころ、古川松根（1813-1871）が、1854年（嘉永7、安政元）に城下の東、会所小路から八幡小路に移ってくる。このとき、久米丈一郎（邦武）は16歳、「大先生」（邦武の言葉）松根の屋敷から一軒置いたすぐ西隣が久米の居宅であった。

安政5年、丈一郎が大隈に誘われ、近所の縁もあり義祭同盟に参加しようとしたとき、当時、同盟の人々は危険分子の一味のように思われること



古川松根旧邸門及び閑叟公ゆかりの松樹（八幡小路）

もあり、丈一郎は、直正公の御側頭であった松根に「勤王論などをしてならぬぞ」^{（註9）}と厳しく極めつけられたことがあった。これに対する丈一郎の言葉は、「勤王と倒幕とを混同した当時の老人の思想の発露に外ならぬ」^{（註9）}といくぶん揶揄するような言い方となっているが、そこにはかえって深い親近感をみることもできよう。松根の心底の思いは、邦武が、直正の御側役に召し出されるに際し、邦武を危惧する声に対して松根が『書生の勤王を唱ふるは普通の事で、其は明に本人に注意すれば宜しい、私が戒ておく、お使ひなされ』と申し上げて置いたから、其の心得せられよ」^{（註10）}と邦武を戒めたところにあったのも確かである。

1871年（明治4）1月18日直正が死去したとき、葬儀委員長は古川与一（松根）、副委員長が久米邦武であった。そして、葬儀万端を整え終えて3日後の21日、松根は、藩主に従うものとしての最後となる殉死をとげた。この直前に松根が墓誌の銅牌に謹書する覚悟の姿と対座したのが邦武であった。松根は、直正公に幼年より形影の如くつき添い、生涯を藩主直正の御側に仕えることで、義祭同盟に加わる術はなかったが、松根は画家として、楠正成像や楠公父子訣別図などをえがき、また歌人としても、正成、正行を詠んだ和歌ものこしていた。尊王に傾くことなく、大先生古川与一は君（直正）への純忠を貫きとおした生涯であった。

百武兼行と小代為重

古川松根の肖像をえがいた油彩画が残されている。作者は不詳であるが、明治10年前後に外交官としての公務のかたわら本格的に油彩画を学んだ百武兼行（1842-1884）は、松根像の作者にふさわしい技量と繋がりを持っていた。松根が第十代藩主直正と築いた関係は、百武と第十一代藩主直大（1846-1921）との間にもみることができる。百武は、1850年（嘉永3）9歳のとき鍋島淳一郎（直大、5歳）の御相手役に選ばれ、これ以後、松根からは将来の側近としての諸事について学ぶが、そうした中には和漢の学とともに松根が得意とした書画も入っていた。また西洋画については、百武の父兼貞が有田皿山代官として、窯業の技術指導のために招請したお雇い外国人ゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagener 1831-1892）との接触は推量し得るところである。

もっとも、西洋画を本格的に学び始めるのは、直大の随員として渡航したロンドンでの滞在からのものであり、その後パリ、ローマとそれぞれ専門の画家に就き、風景画から人物画へと、さらに神話・歴史画まで、西洋の美術アカデミーの階梯を着実に踏んでいくのであった。

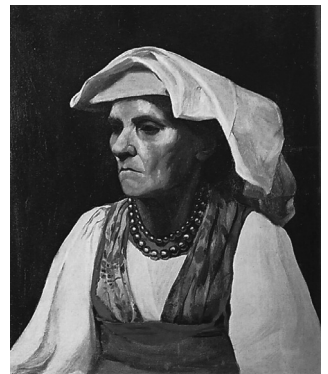
百武氏の勉強は又非常なもので、公使館の事務をやる、侯爵の世話をする、一寸でも暇があれば画を描くと云ふ調子で、画を専門にやる者も及ばない位であった。全体画をやる前から経済学者で、非常に意志の強い人で、終には経済学の方が重になつたが、画はどうしても止められなかつた。

（小林鐘吉「故百武兼行伝」『光風』第4年第2号、p. 25）

百武の画業のほとんどは外国であり、国内でえがいた作品は、一時帰国した1880年（明治13）制作の《朗姫像》（直大・胤子夫妻の長女で、加賀前田家に嫁ぐ）が知られるくらいであるが、明治12年末から1年に満たない日本滞在期間において、他に作品をえがいた可能性がないとは言えない。



作者不詳《古川松根像》



百武兼行《老婦人像》 1879年頃

作者不詳の油彩画で《鍋島直正像》（鍋島報効会）など、百武の筆致と比較しうる作品もあり、最初に触れた《古川松根像》も同じようにみてよいかもしれない。

日本近代洋画史において、百武は国内において画家としての足跡を刻むことはなかったが、《臥裸婦》（アーティゾン美術館）をはじめ、残された作品からは近代の黎明期の画家として十分に評価されうる画家であった。日本の画家との交流も、岡山藩の松岡寿（1862-1944）など挙げることができるが、百武の指導を受けた画家として^{（註11）}、鍋島家の家臣中野一門（本論関係略系図、27頁）につらなる小代為重（1861-1951）がいた。

小代は慶応幼稚舎で絵を得意とし、図画（洋画）を正科として学んだが、急須や土瓶の鉛筆画を模写するような授業だった。百武に学んだとするならば、1880年（明治13）頃のあるいは工部省修技校時代あたりだろうか。しかし、小代の実際の専門は絵ではなくて、機械工学だった。「従つて絵は私（小代：筆者註）にとつては余技だつたのである」^{（註12）}。『黒田清輝日記』にしばしば登場し、彼自身は「一ぱしの絵描き然と構へて活躍した」^{（註12）}のであった。よき画家仲間として、黒田清輝（1866-1924）は1897年（明治30）、箱根湯本の萬翠楼で小代の肖像画をえがいていた。

東郷青児（1897-1978）は青山学院で小代に図画を学ぶが、その当時を回顧した中で、小代について「どう見ても日本人と思えない赤いチョビげと、かり込んだあごひげをはやした背たけの小

さな人で、モンマルトル辺にうようよしている誇り高き薄幸の老画家を連想させられる不思議な先生だった。」^(註13)と語っているが、東郷が画家への道を志すにあたって「かけがえのない大先生」でもあったのである。

久米桂一郎と岡田三郎助

明治の御一新で時代が大きく転回しようとするとき、久米と岡田は3年違いで佐賀城下八幡小路に生まれた。また、二人は、佐賀藩の着座の家柄であった中野家を介して、遠い縁戚関係になる。

久米先生と私（岡田：筆者註）は同郷で、私の姉が、先生の姉さんとをさな友達であり、又遠い親類の縁家にも当つてゐました関係から、相当古くから識つて居りました。国では私の家の筋向ひに、先生のお住居があつたと云ふ話を先生から聞いてゐましたが、私は三歳の時に上京しましたので、その事は私は憶へて居りません。

（岡田三郎助「久米先生と私」『アトリエ』11巻9号、アトリエ社、1934年、p. 54）

久米桂一郎が、1866年（慶応2）、邦武、母淑の嗣子として生まれたとき、邦武は28歳であり、邦武はその後、藩校弘道館の教諭となり、藩政改革案を起草するなど藩政に尽力した。1871年（明治4）1月、鍋島直正の逝去と古川松根の歿死、さらに4月には邦武の父邦郷の死去と相次ぐなか、邦武は藩主直大のもとで家令の深川亮蔵（1832-1902）を助け、鍋島家家扶に任命され上京する。そして11月には明治新政府の権少外史に任じられ、特命全権大使岩倉具視の米欧派遣の随行を命じられた。このとき桂一郎はまだ佐賀にいた。東京築地の父のもとへ、家族とともに呼び寄せられるのは1874年（明治7）、桂一郎9歳のときであった。

桂一郎にとって、父邦武は、洋行経験者とはいえ「全くの漢学者」^(註14)であつて、「全く風変りな教育のやりかたで、（中略）小学校を終つた後は、全く

新式の教育は受けなくて、四五年の間はうちに居て、漢籍ばかりを父の側で読まされていた」^(註14)。この邦武の真意ははたしてどこにあったのか。西欧文明に触れた邦武があえて桂一郎に『左伝』『史記』『戦国策』などの漢籍を読ませたのは、将来日本を西欧に伍して立ち行かせるその精神的な土台を彼に築かせようとしたのではないだろうか。『九十年回顧録』の「文学博士易堂先生小伝」には、

令嗣桂一郎君の小学校を卒ふるや、独学自修せしめて高等の学校教育を受けしめず、蓋し、学問は自発に因るとの主義を実行せられしならん。

（久米邦武『久米博士 九十年回顧録（上巻）』（早稲田大学出版部、1934年、p. 319）

と記されている。この「学問は自発に因る」こそが、邦武が自ら実践し、さらには我が子桂一郎に課した自立の精神であつたように思われるのである。

こうして、桂一郎が初めて西洋画にふれたのは、邦武の帰国時の土産を通してであつた。「土産の一つとして幾何かの西洋画を持つて来たが、多くはクローム版の印刷物であつたけれ共、内には五六枚の油絵もあつた」。^(註14)そうしたものを日頃見ていたことが絵を始める「一つの原因」ともなつたようだ。1881年（明治14）、桂一郎16歳のとき、第2回内国勸業博覧会の出品作品を見て、ふつつつと湧き上がる西洋画学習の念を父邦武に伝えたところ、「大いに賛成を得た」^(註15)ことは、邦武自身のまさに本場の西洋画理解を念頭においての言葉ではあるにしても、そこに桂一郎の自発的な意志を感じとつたからに違いない。こうして父の賛意を得ることによって、桂一郎の西洋画学習の道が急速に拓けていくことになる。

久米の生家の西隣は、長崎街道へと通じる南北の通りを挟んで中野益明（忠太輔、1813-67）の屋敷であつた。岡田（旧姓石尾）三郎助の母多免の実家である。岡田はここを「私の家」と回顧しているように、彼はこの中野の家で生まれ幼少時

を過した^(註16)。岡田が画家を志した最大の助言者であった叔父中野健明（1844-98、1867年家督を継ぐ）は多免の弟で、岡田が生まれた2カ月後には東京遊学を命じられている。すでに1863年（文久3）には長崎でグイド・フルベッキ（G. F. Verbeck 1830-1898）に英語を学んでいたが、1871年（明治4）の岩倉使節団46名の随員（司法権中判事）となり欧米を歴訪する。一行には、「和漢の学識者」として久米邦武がいたが、この使節団には、公武華族の同行が多数あり、鍋島直大はその一人として、随員に百武兼行を伴っていた。このときの百武について岡田は、叔父健明から多くのことを聞かされることになる。

絵は八ツ頃から好んで描いた。たゞし最初から同藩の大先輩百武兼行の影響を浮くる所多く、子供ながら陰影を入れた絵なぞ描いてみた。

（岡田三郎助「アトリエ雑話」『東京朝日新聞』1932年9月17日）

私の叔父の中野健明、（中略）此の叔父は百武さんと友人でありました故に、百武さんが如何に油画の技法を研究して居られたかをよく私に話しをしてくれた。

（岡田三郎助「若き日の思ひ出」『肥前協会』第37号、1937年、pp. 2-3）

また、鍋島侯邸の周りを取り囲んでたくさんの長屋があり、その長屋の一つに石尾家は住んでいた。百武も同じ長屋に住み、と言っても、百武はほとんど外国に行っていて、長屋の家は空き家同然であって、出入りも自由で、そのため、絵を眺めることができたのだという。その他にも侯爵邸には百武の絵が飾ってあって、幼年期の岡田をひどくひきつけた。岡田はこうして、おのずから絵の世界に入っていったと言える。

なお、岡田の母方の中野家は、「葉隠」の口述者山本常朝の父中野重澄の弟、中野権右衛門正弘（1668年没）を祖とする中野分家であった。また、中野健明は、使節団の帰国後は、フランス、オランダの公使館に勤務し、1886年（明治19）大蔵省

関税局長兼主税局長から長崎県（明治23～26年）、神奈川県（明治26年～）の知事を歴任するも、1898年（明治31）死去した。享年55。このとき甥っ子岡田三郎助はパリ留学1年目を終えたところだった。

高木背水

洩れ承はる所に依れば天皇は写真を取ることがお嫌ひであつたために撮影申上ぐる機会が至つて乏しかつた。で崩御の後宮中に安置すべき御肖像を作成するに就ても当事者は非常に苦しんだ。其結果当代人物画の大家五人を宮中に召して僅に存する御写真を基として執筆せしめ、高貴な御方々を始めとし奉り近側の女官達をして批評せしめ、修正に修正を加へ半歳にして漸く成つた。而して思召に叶ひ御採用になつたものは高木背水の作である。口絵に掲ぐるは即ち其複写である。

（林田亀太郎『明治大正 政界側面史 上巻』大日本雄弁会、1926年、pp. 582-83）

高木誠一郎（背水、1877-1943）は、代々肥前の国の豪族、高木氏の嫡流である。幕末、佐賀藩きっての志士高木権兵衛の代で家系が一時絶えようとしたとき、直正公の庶兄鍋島安房の三男、豹三郎が養子に入って家を継ぐことになる。この豹三郎の長男が背水である。背水が生まれたのは、北堀に面した北堀端小路であり、通りの北側には松並木が続き、その向こうが松原小路であり、かつて上級家臣団の一角を形成していたところである。背水は、幼少頃は名家の坊ちゃんであるが、物心つく頃には、高木家は父豹三郎の、佐賀の乱（佐賀戦争）と西南戦争の二度にわたる戦役への参加のため破産宣告を受けていて、幼少年時代から青年期まで、背水は非常な苦境の中に生きることになる。まさに後に「背水」の号となる「背水の陣」こそは、「彼の生涯に付纏つた宿命」^(註17)へ

の抗いの狼煙であったのだった。



高木背水《明治天皇像》
1921年（大正10）か
佐嘉神社

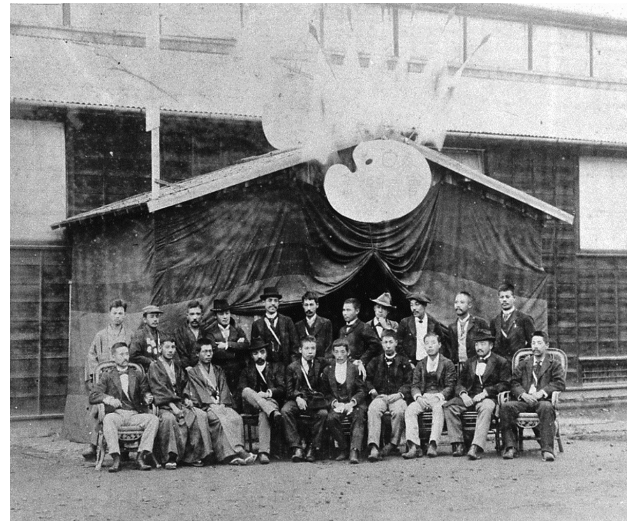
「背水伝」等の記述から、背水は、明治天皇像を3点描いたことになる。最初の尊像は大正4年、天覧を賜い上納された。2点目は同年描き、大正9年頃、東宮御所に納められた。3点目が左図で、大正10年に制作し、昭和15年に佐嘉神社に奉納された。

しかし、一方で絵の勉強に通いながら鍋島侯爵家の玄関番書生となった背水は、侯爵家を訪れる人たちからしだいに絵を認められるようになってきていた。1897年（明治30）以降のことで、宮内庁侍医も務めたベルツ博士（Erwin von Bälz、1849-1913）はその一人であり、さらに鍋島直大夫人、栄子の兄となる藤波子爵（藤波言忠、1853-1926）は当時宮内省主馬頭であり、背水が明治天皇肖像画制作の「大家五人」に選ばれる大きな要因ともなっただろう。そうした結果、先に見たように、背水は明治天皇像をえがき、宮中に納められたのは唯一背水えがくところの大帝であったのである。

おわりに

幕末の楠公義祭同盟は、佐賀藩での明治維新運動の原動力となった。江藤新平、大隈重信、島義勇、大木喬任、副島種臣らをはじめ、多くの旧佐賀藩士たちは明治新政府の重責を担うこととなった。そしてここに紹介した画家たち、とくに久米、岡田、高木らの父、叔父たちも、若くしてともに国の将来を論じ、国事に奔走した者たちであった。一方、百武は松根と同じように藩主につき従うも、近代を先駆けた画家として西洋の伝統的な絵画を学んだ。そして次世代となる久米、岡田、高木らは、幼少年期に上京し、佐賀とのかかわりも薄れていくなかで、それぞれが自己の本然の資質によって絵をえがくことが、生きる最上の目的となって

いったのである。しかし、1894年（明治27）、久米、岡田らが参加した画塾天真道場を命名したのが久米邦武であったことを知り、さらに2年後に創設された美術界の新派、白馬会に久米、岡田、小代が会員となり、高木が白馬会研究所に入所していたことに目を向けるならば、幕末、佐賀城下で繰り広げられた義祭の行動が、いまや美神の世界へと受け継がれていたことを思うのである。それはまた、武士が心において失ってはならないものと、画家が作品において求めつづけるものとの一致であり、そのときかれらの御神体は「真（あるいは「まこと）」であり、そして「自由」であるかもしれなかったのである^(註18)。



第1回白馬会展会場前にて、上野公園、1896年（明治29年）
（後列）左4人目から、岩村透、久米桂一郎、藤島武二
（前列）左から、小代為重、岡田三郎助、二人おいて和田英作

註

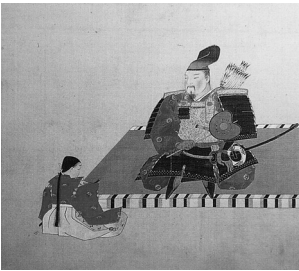
- (1) この八幡宮の参詣、くじ占いについては、18歳で還俗した中納言円月（龍造寺隆信）が村中城の支城水ヶ江城主になったときのことかともいわれる。（川副博『五州二島の太守 龍造寺隆信』（原著出版は1967年）川副義敦考訂、佐賀新聞社、2006年、pp. 114-115）
- (2) 『楠公義祭同盟』楠公義祭同盟結成百五十年記念顕彰碑建立期成会、2003年、pp. 19-20、p. 170。勸請年代については、建久年間（1190-99）、高木南次郎季家（1227年〈嘉禄3年〉、龍造寺姓に改名）の子季益のときであったという説もある。（川副博、同前書、p. 17／『佐賀の栞』（佐賀県、1926年、p. 21））
- (3) 『佐賀県神社誌要』には「慶長十二年鍋島信濃守勝茂の代に至り現在の地に遷座して」（p. 33）とあり、また『佐賀の栞』には「同（慶長：筆者註）十二年鍋島勝茂神殿・拝殿を造営し、常夜燈を献じた」（p. 21）とあるが、1548年（天文17）、龍造寺胤栄の代とする説もある。（川副博、前掲書、p. 17）
- (4) 加瀬正一「久米邦武の私的側面」『久米邦武の研究』（『久米邦武歴史著作集』別巻）吉川弘文館、1991年、p. 470。
- (5) 栗原荒野『葉隠の神髓』惇信堂、1943年、〈解説〉pp. 40-41。
- (6) 邦武は『久米博士 九十年回顧録（下巻）』（早稲田大学出版部、1934年）において、「閑叟公の思想は万機公論に集約される。」（p. 552）としたが、ここに至る直正の性情の寛大さや自由さについては、p. 74、p. 442においても述べられている。また、枝吉神陽の弟副島種臣も、直正の臣下への「黙許」とも言える応接について語っている。「副島伯経歴偶談」『東邦協会会報 第41号』（東邦協会、1897年、p. 16、p. 26）
- (7) 「枝吉、相良の二人主唱して、同志と共に城西西川路村梅林庵なる楠公父子の像に義祭同盟を始むるや、彼（鍋島安房：筆者註）は之を聞知して公への告ぐるところあり、」（『鍋島直正公伝 第4編』中野礼四郎編、侯爵鍋島家編纂所、1920年、p. 149）
- (8) 前掲『楠公義祭同盟』、p. 21、pp. 208-209。
- (9) 久米邦武『久米博士 九十年回顧録（上巻）』早稲田大学出版部、1934年、p. 319。
- (10) 同上、p. 610。
- (11) 岡田三郎助「若き日の思ひ出」『肥前協会』第37号、1937年、p. 4／『日本美術年鑑（昭和30年版）』東京国立文化財研究所美術部、1956年、p. 183。
- (12) 小代為重「明治洋画壇の追憶」『肥前協会』第46号、1938年、p. 36。
- (13) 『私の履歴書 文化人6』日本経済新聞社、1983年、p. 131。
- (14) 久米桂一郎「私の学生時代」『方眼美術論』中央公論美術出版、1984年、p. 249-251。
- (15) 同上、p. 252。
- (16) 東京藝術大学に保管されている岡田三郎助の履歴書には、「佐賀八幡小路ニテ生ル」と書きしるされている。
- (17) 直木友次良『高木背水伝』大肥前社、1937年、p. 40。
- (18) 松本誠一「天真道場から白馬会へ—真なる自然から光風へ」『白馬、翔びたつ—黒田清輝と岡田三郎助』展図録、佐賀県立美術館、2021年、pp. 4-8 / 「日本美術にみる理から真へ—江戸から明治に—再論」『佐賀県立博物館・美術館 調査研究書 第49集』2025年、pp. 39-59。



明治元年、松根56歳頃



《郭子儀祝賀図》 1860年(萬延元)

《楠公父子訣別図並和歌屏風》
(二曲一隻)部分、安政(1854-59)頃

古川松根

1813(文化10)年10月16日-1871(明治4)年1月21日

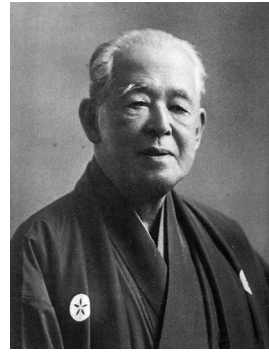
通称は與一。楢園、寧楽園、霞庵などの別号をもつ。江戸桜田の鍋島藩邸に生まれ、幼年より1歳下でのちの藩主閑叟公の御相手役となりさらに近習頭をつとめるなど、公に侍して終生形影相随う。他方、多藝多能として知られ、和歌を香川景樹にまなび、小車社を結成。また書画にすぐれ、国学、有職故実に通じた。明治4年正月18日、閑叟公が薨じるや、葬事万端を主り、3日後に久米邦武へ用向きを言い終えたのち、洋毯を正室に敷き、端座して自刃する。享年59。

佐賀藩近習頭、肥前の国学者にして通称與一、文化十年十月生れ、和歌、書、画を能くし、幼より君側に侍し四十年一日の如し。明治四年正月廿一日自刃して藩主に殉す。年五十九。(久米邦武)『明治過去帳〈物故人名辞典 新訂版〉』大植四郎編著、東京美術、1971年、p. 30)

直正銅像ノ近後ニ古川松根ノ銅像アリ、松根通称與一、寧楽園、楢園、霞庵等ノ号アリ、幼ヨリ直正ノ近侍トナリ信任浅カラス、直正ノ薨去スルヤ非常ニ痛哭シ其葬儀ノ日ニ殉死ス、松根最モ和歌ニ長シ典故ニ通達シ書画ニ巧ミニ又能ク刀剣ヲ相シ器具ヲ鑑定シ篆刻ヲ能クセリ、尚純忠至誠ト云フ点ヨリ之ヲ見レバ實ニ武人ノ龜鑑タルモノアリ、文武両道ニ通シ百藝ニ熟達シタル偉人ナリト云フ可シ。(『県社 松原神社』鶴清氣編集兼発行、1926年、p. 23)

参考文献

『寧楽園歌伝 純忠古川松根』内柴二男童編集兼発行、1926年／『楢園遺集』大隈栄一編集兼発行、1926年／『古川松根一人と作品一』佐賀県立博物館編集、財団法人鍋島報効会、1988年。



大正15年、邦武88歳

久米邦武

1839(天保10)年7月11日-1931(昭和6)年2月24日

佐賀藩士久米邦郷、和嘉の三男として生まれる。幼名、泰次郎、のち丈一郎、丈市。後年、易堂と号す。1854年(安政元)、藩校弘道館に入り(安政6年卒業)、蒙養舎で、1年上級の大隈八太郎(重信)を知る。1863年(文久3)、最優等生として江戸遊学を命ぜられ、昌平坂学問所(昌平黌)に入学。1864年(元治元)、昌平黌を退学帰藩し、藩主鍋島直正の近習となる(元治年間頃、田中熊太郎の姉淑と結婚)。明治元年、藩校弘道館の教諭となる。明治4年、父邦郷死去。同年、鍋島家家扶となり、上京する。同年、明治新政府の権少外史に任ぜられ、特命全権大使岩倉具視の米欧派遣の随行を命ぜられ、12月、横浜を出港する。太平洋を経て、米・欧の諸国を巡歴。同6年9月、岩倉一行とともに横浜に帰船する。翌7年、東京築地に居を構える。同11年、太政官少書記官に任ぜられ、『特命全権大使 米欧回覧実記』全五冊を刊行する。同書編修の功により、賞として金500円を下賜される。同12年、太政官の修史館に転任(同19年、修史館廃止)。同21年、臨時修史局が帝国大学に移管され、帝国大学文科大学教授、臨時編年史編纂委員となる。同22年、帝国大学文科大学に国史学科が新設。史学会設立に尽力し、『史学会雑誌』創刊に努め、以後、同誌(同25年、『史学雑誌』と改題)に論文を発表する。同23年、『稿本 国史眼』全7冊(共編)を刊行。同24年、論文「神道は祭天の古俗」を『史学会雑誌』に連載発表する。同25年1月、田口鼎軒によって、『史海』第8巻に、「神道は祭天の古俗」が一举に転載され多くの人々の目に触れて、論文内容が問題視され、守旧的な神道家などの非難を呼ぶ。3月、この筆禍事件により、帝国大学教授を依願免官となる。同29年、妻淑死去。同年、母和嘉死去。同32年、東京専門学校(同15年、大隈重信創立。同35年9月、早稲田大学と改称)文学科史学科の講師となり、「国史」を担当。同44年、教授となる(大正2年7月まで講義担当)。大正11年3月、この年1月の畏友大隈重信の死去に伴い、早稲田大学講師(大正7年、教授嘱任を解かれ、講師となる)を辞任。昭和4年、伊豆三津に別荘を設け、翌年末まで越年する。同6年、東京市外上大崎永峰の自邸に於いて死去。享年93。

参考文献

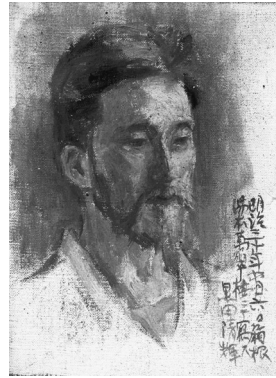
久米邦武『久米博士九十年回顧録』(上下巻)早稲田大学出版部、1934年／『久米邦武歴史著作集』(全5巻、別巻1)吉川弘文館、1988-91年／『歴史家久米邦武』(新訂版)久米美術館、1997年。



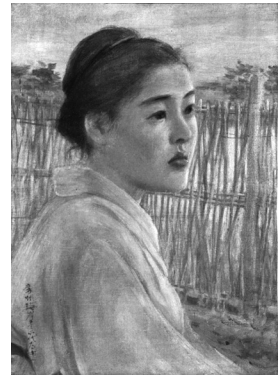
明治14-15年頃、兼行40-41歳



《タンバリンを持つ少女》
1881年（明治14）頃



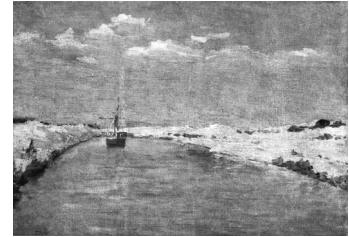
明治30年、為重40歳、黒田清輝筆



《少女像》1897年（明治30）



《バーナード城（下絵）》 1878年（明治11）頃



《スエズ運河》
1900年（明治30）

百武兼行

1842（天保13）年6月7日-1884（明治17）年12月21日

佐賀藩士百武兼貞の次男として片田江に生まれる。嘉永3年鍋島淳一郎（直大、5歳）の御相手役に選ばれる。明治4年11月12日岩倉遣外使節団に同行の直大随員として横浜を出発。ワシントン見学以後岩倉一行と別れる。翌5年にはロンドンに到着、経済学を学ぶ。明治6年パリへ渡り、イタリア、ウィーン万博ついでドイツ、オランダ、ベルギーを巡遊しイギリス・オックスフォードにもどる。明治7年佐賀の乱（佐賀戦争）の報せで急遽帰国。同年8月13日直大の再渡英に随行、同8年直大夫人胤子とともに風景画家リチャードソン（Thomas Mile Richardson, Jr 1813-1890）について油絵を学ぶ。同9年ロイヤル・アカデミーに作品を出品。同11年パリに滞在、レオン・ボナ（Léon Joseph Florentin Bonnat 1833-1922）に師事。同12年後半に帰国、同13年病気療養中の胤子夫人（3月30日歿）を神戸に見舞う。このとき夫人の長女朗子を描いた《朗姫像》は国内で描いた唯一の人物画となる。同年7月9日駐伊特命全権公使鍋島直大に随い横浜出立、松岡寿が同行。このとき五姓田義松も同船。ローマでチェザーレ・マッカリ（Cesare Maccri 1840-1919）に師事。このローマ滞在1年半余りの間に《臥裸婦》《ピエトロ・ミッカ図》など大作を描く。同14年8月20日外務書記官。同15年5月29日帰国、9月11日正六位、帰国後は農商務省に出仕、権大書記官となる。同16年12月病を得て帰郷。同17年7月24日付で農商務省商務局長心得。同年在職のまま死去。享年43。

参考文献

小林鐘吉「故百武兼行伝」『光風』第4年第2号、1908年／三輪英夫編『近代の美術53 百武兼行』至文堂、1979年。

小代為重

1861（文久元）年11月11日-1951（昭和26）年6月1日

佐賀城下西堀端小路（赤松町）に鍋島家・御相談人中野数馬匡明の四男として生まれる。生年については『日本美術年鑑』（昭和30年）では「1863（文久3）年10月11日」となっているが、青山学院に残された手書きの履歴書には、明治16年以前の履歴事項が記載されていないものの、末尾の記載年が明治33年（翌年から青山学院雇）でそこに署名された傍らに、自筆による「文久元年十一月十一日」の書入れがある。明治8年上京。同年3月21日、慶応義塾幼稚舎（当初和田塾から慶応義塾幼年局）に入社（慶応義塾幼稚舎入社名簿には戸主及び証人姓名欄に佐賀県士族水町義正、本人姓名は水町義成とあり、旧幼稚舎同窓会名簿（発行年不詳）にも、「小代為重（旧水野義成）」と書かれているが、中野から水町そして小代への改名の時期等については不明瞭である。幼稚舎から本科にいたり中途退学し、工部省修技校に学ぶ。百武兼行に洋画を学ぶのはこの頃か。明治16年4月12日千葉師範学校教員（辞令書宛名は水町義成）。同年12月28日千葉師範学校三等助教諭（辞令書宛名は小代為重）。この年（明治16年）に小代家に養子として入籍。当時の小代家は中野重宗（中野規明二男）が継いでいて、為重の叔父にあたる。同19年5月4日工科大学雇。同22年明治美術会ついで同29年白馬会設立に参加。この間、同20年12月8日東京電信学校助教、同23年3月31日東京郵便電信学校助教で大正13年まで機械製図を教える。同32年10月22日巴里万国博覧会出品聯合協会渡航事務員に選定されパリへ渡航。同34年から岩村透の後を受け青山学院中学部及青山女学院で教鞭をとる。昭和3年3月29日大札記念郵便切手類意匠図案審査委員を嘱託。世田谷区玉川町の自宅で死去。享年90。

参考文献

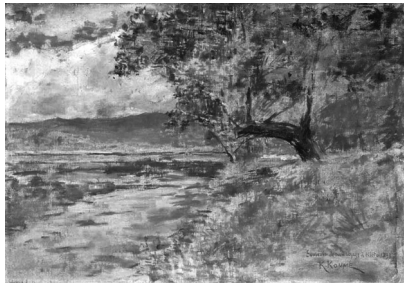
小代為重「明治洋画壇の追憶」『肥前協会』第46号、肥前協会、1938年／『日本美術年鑑』昭和30年版、東京文化財研究所、1956年。



大正期 桂一郎40代中頃



《残暉 (下絵)》1898年 (明治31)



《京都加茂川の景》1893年 (明治26)

久米桂一郎

1866 (慶応2) 年8月8日-1934 (昭和9) 年7月27日

佐賀城下八幡小路に生まれる。明治7年、東京築地の父邦武のもとへ上京。同8、9年頃から役者絵などを引き写し着色する。同12年文海学校小学尋常科を卒業、以後父の傍で『左伝』、『史記』など漢籍を素読。同14年第2回内国勲業博覧会出品の藤藤三のコンテ画を見て、同17年同氏に師事、同19年7月フランスへ私費留学。パリ滞仏中に藤の紹介でラファエル・コラン (Louis-Joseph-Raphaël Collin 1850-1916) に入門。同年10月初旬黒田清輝と出会い、同20年4月から黒田と同居、パリを拠点にスペイン、ベルギーなど各地を巡り、絵画を研究。同26年6月帰国、京橋区三十間堀で父と暮らす。同27年夏、黒田清輝、岡田三郎助とともに横浜本牧、相州鎌倉に滞在。10月黒田とともに山本芳翠の生巧館を譲り受けて画塾天真道場を開設。同28年4月第4回内国勲業博覧会 (京都) 出品の《清水秋景図 (山径晚暉)》 (奈良県立美術館所蔵) が妙技二等賞受賞。同29年1月中野磯千代 (同32年歿) と結婚。同年4月東京美術学校西洋画科の美術解剖学および考古学の授業を嘱託、同年6月白馬会設立に参加、同31年東京美術学校教授となる。白馬会第3回展に《残暉》他2点を出品。以降は絵画制作から遠ざかる。同43年3月日英博覧会出品協会事務取扱としてイギリスへ渡航、翌年3月帰国。大正4年1月サンフランシスコ万国博で渡米、翌年1月帰国。大正11年10月帝国美術院幹事。同15年8月勲三等瑞宝章受章。昭和7年2月東京美術学校教授を依願免官。同年6月同校名誉教授。同9年品川区上大崎の自宅で死去。享年68。

参考文献

『久米桂一郎作品集』久米晴子編集兼発行、1935年／久米桂一郎『方眼美術論』中央公論美術出版、1984年／『久米桂一郎日記』三輪英夫編、中央公論美術出版、1990年／『久米桂一郎作品目録』久米美術館、2000年。



昭和7-8年頃 三郎助64,5歳頃



《涼々園にて》1935 (昭和10)



《花野》1917年 (大正6)

岡田三郎助

1869 (明治2) 年1月12日-1939 (昭和14) 年9月23日

佐賀藩士石尾孝基、母中野多免の三男 (6人兄妹の末子) として八幡小路に生まれる。明治4年頃上京し、鍋島侯爵邸の長屋に住む。8歳頃から絵を好んで描き、鍋島侯邸内の百武兼行の油絵に接して洋画家を志す。明治20年小代為重の紹介で曾山幸彦、その後堀江正章の画塾に学ぶ。明治27年久米桂一郎を通じて黒田清輝と出会い、画塾天真道場入門。明治28年第4回内国勲業博覧会出品の《初冬晚暉》が妙技三等賞受賞。同29年白馬会設立に加わり、同年新設の東京美術学校西洋画科助教授となる。同30年第1回文部省留学生として渡仏、ラファエル・コラン (Louis-Joseph-Raphaël Collin 1850-1916) に師事。同35年1月帰国、東京美術学校教授となる。同39年小山内薫の妹八千代と結婚。同40年《紫調べ (某夫人の肖像)》 (アーティゾン美術館) が東京勲業博覧会で1等賞受賞。同年第1回文展に審査員として出品、以後文展、帝展を中心に活躍。早い時期から女子美術教育の必要性を認め、自宅アトリエや女子美術学校において指導に携わる。また工芸品に対する関心から、世界各国の陶磁器、硝子器、木工品、金工品、皮革品、刀子、染織など幅広く蒐集を行い、なかでも時代裂や着物などの染織の蒐集品は岡田の婦人像制作の大きな構成要素となっている。大正8年帝国美術院会員、昭和9年帝室技芸員、同12年第1回文化勲章受章。昭和14年渋谷区伊達町96の自宅で死去。享年71。

参考文献

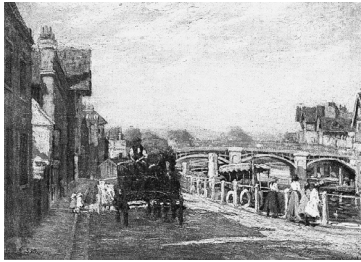
大隅為三・辻永編『画人岡田三郎助』春鳥社、1942年／松本誠一『佐賀偉人伝03 岡田三郎助』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2011年／『岡田三郎助—エレガンス・オブ・ニッポン—』佐賀県立美術館、2014年。



昭和9年頃 背水50代後半



《佐賀城誠の門》1936年（昭和11）



《ウインザー橋の朝》
1911年（明治44）

高木背水

1877（明治10）年9月5日-1943（昭和18）年5月12日

佐賀城下松原町に生まれる。父豹三郎は閑叟公（鍋島直正）の庶兄鍋島安房の三男。背水は号で、本名誠一郎（後に誠一と称す）。明治7年佐賀の乱（佐賀戦争）そして3年後の西南戦争により戦国時代からの豪族高木家の家産は失われ一家は離散。同22年8月背水は上京、鍋島守五郎（文武、生年：天保10年、鍋島直正末弟）邸に奉公する。同26年頃田中猪太郎の写真版印刷工場に奉公、ここで岡田三郎助を知る。翌27年画塾大幸館に入門、その後白馬会研究所に通う。同30年鍋島侯爵家の玄関番書生となり、藤波言忠（1853-1926、子爵）、エルヴィン・ベルツ（1849-1913、東京医学校教師、宮内省侍医）らの知遇を得る。同35年2月姉潔子、広津柳浪に嫁ぐ。この頃「背水の陣」を決意し侯爵家を辞し、同36年ベルツ博士の朝鮮行に標本技師（画家）として同行。同37年5月渡米、コロンビア大学美術科で学び、同39年4月帰国、富美子と結婚する。同40年第1回文展に出品。同41～42年実業家村井吉兵衛の京都別邸（長楽館）の壁画を描く。同43年4月渡英、ジェームス・クイン（James Peter Quinn 1869-1951）、レオナルド・ヒル（Leonard Raven-Hill 1867-1942）に師事。ロイヤル・アカデミーに出品。大正元年2月帰国、翌2年永田町鍋島侯爵邸の一隅に画室を新築。同3年明治天皇肖像画の制作に着手、翌4年完成し天覧を賜る。同年秋朝鮮に渡り同8年まで滞在。朝鮮美術展覧会開設に尽力し、同11年第1回展覧会の審査員ならびに評議員となる。同9年と昭和元年、同6年にそれぞれ1年余り渡欧。同5年練馬にアトリエを建てる。文展、帝展ほか光風会展、白日会展などに出品。同16年肥前高木家菩提寺正法寺山門に、東高木家嫡流の高木良次とともに石碑を建てる。練馬の自宅にて死去。享年67。

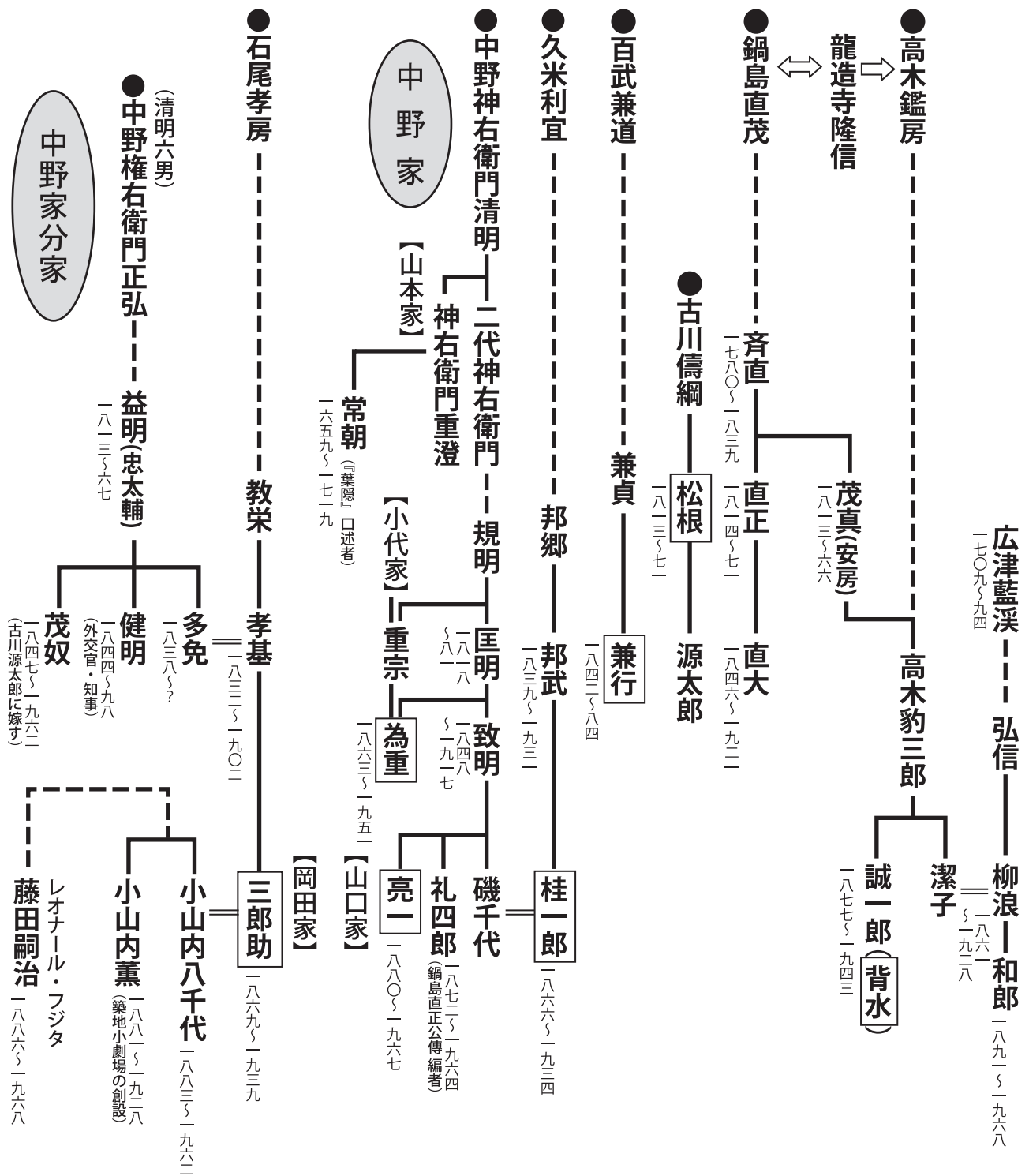
参考文献

直木友次良『高木背水伝』大肥前社、1937年／副島伊三郎「高木背水画伯を偲ぶ」『人間創造』社会奉仕光華園、1977年9月～78年11月／『高木背水展』佐賀県立博物館、1982年／松本誠一「高木背水の画歴について」『デア ルテ』（第1号：九州藝術学会誌）、西日本文化協会、1985年。

（まつもと・せいいち／

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館名誉顧問）

旧佐賀藩士と佐賀県出身の洋画家
関係略系図



* 本系図作成のため下記資料を参考にしました。
『中野家分家の系図』／松本誠一「石尾家・中野家の系譜」『佐賀県立博物館・美術館報』No. 134、2005年／富田紘次「侯爵鍋島家と旧佐賀藩士百武兼行関係略系図」（公開研究会「近代日本と近代イタリアの共鳴」配布資料）公益財団法人鍋島報効会、2023年。